

大<sup>おお</sup>  
矢<sup>や</sup>  
和<sup>かず</sup>  
枝<sup>え</sup>

米軍人の父とウチナーンチュの母の子として生まれて  
く人との出会いの中で沖縄と向き合えるように



## プロフィール

琉球政府立（現沖縄県立）読谷高校卒業後、大阪府内の紡績会社に集団就職、併設の専門学校で保育を学ぶ。資格取得後は東大阪市で保育士として働き、一九九〇年代後半から沖縄への思いのある人々と「市民グループ沖縄の風」として活動も続けた。

○司会 ただいまより令和二年度講座「生きること」の第二回目を開催いたします。

本日はお忙しい中、ご参加いただきまして誠にありがとうございます。

それでは、本日お招きしました講師、大矢和枝さんのプロフィールをご紹介します。大矢さんは、沖繩の読谷村で戦後間もなく、米軍嘉手納基地に勤務していた米国人の父と、そこに働いていた日本人の母との間にお生まれになりました。米兵の父親は大矢さんが生まれる前に姿を消し、母親も大矢さんが三歳のときに病気で亡くなり、大矢さんは叔父さんと叔母さんに育てられたそうです。当時、大矢さんのような立場の子どもたちはそれほど多くはなく、周りから理解され、受け入れられる環境ではなかったため、高校卒業後、逃げるように沖繩を去り、大阪府内の紡績工場に集団就職し、併設の専門学校で保育を学ばれ、資格取得後は東大阪市で保育士として勤務をされます。それまで自分の中にある沖繩を抹殺したいと思いつつながら生きてきた大矢さんですが、現在は沖繩どっぶりの生活を送られておられるそうです。その間に何があり、どのような心の変化があったのかは、このご講演の中で語っていただけたらと思います。

それでは、本日の講師、大矢和枝さんをお迎えしたいと思いますので、拍手でお迎えください。

(拍手)

○司会 それでは、大矢さん、ご講演よろしくお願いたします。

○大矢和枝 初めまして、大矢和枝です。こちらこそ、よろしくお願いたします。

旧姓は仲村和枝です。沖繩では仲村和枝でした。ナカムラっていても、こちらの内地では、

にんべんの付く「仲村」は余りないんですね。沖縄の場合にはにんべんが入っています。戦前は仲村じゃなくて、仲村の次に、溝のことを言う「暗渠（あんきよ）」の「渠」ってありますよね。ちよつと難しい字なんですけど、この字が入って、仲村渠（なかなだかり）っていう苗字で、「なかなだかり」っていうたら、もう沖縄っていう感じでしたので、おじいちゃんが戦後、もう仲村にしようっていうことで、このややこしい字を取ったので、私は、すごくありがたいなって思っていたんですけど、今は、やっぱり仲村渠（なかなだかり）でもよかったんじゃないかなっていう思いがしています。今は東大阪で大矢和枝という名前で生活しております。今日は、ちよつと一時間半っていったら、どんなふうに関わり立てていいかわからないので、ちよつと戸惑いながらやっています。ですから、皆さん、よろしくお願いいたします。

今日参加された方で、沖縄の出身の方、おられますか。おられないようですね。おられると、ちよつと緊張するんですね。私が生きてきたことと、それから、その方が生きてきた場所も違えば、思いも違うところがありますからね。一方的にこちらからの思いだけを伝えると、その人には申し訳ないなって思うときもありますのでね。やっぱり沖縄の方がおられると、言葉をすごく選ばないといけないんだっていう感じになって。そういう意味では、今日は、もう一人称で、私の思いのたけを語らせていただきます。よろしくお願いいたします。

私は沖縄戦後の米軍統治下という状況にあった沖縄で生まれ、育ちました。その事が、今の私に大きな影響を与えたのだと思っています。そして、小・中・高校と育っていく中で、先生方と

の出会いには、私にとつてとても大きく、ギアチェンジするようなチャンスを与えてくださいました。その事にも少し触れながら、お話をさせていただきます。

私の母は戦後、宜野座にあった収容所生活のあと、故郷の読谷村の高志保っていう集落があるんですが、そこは読谷村のメインストリートのようなところで、そこに居ました。今行くと面影はないですが、ちっちゃなお店が幾つかあって、そのときはメインストリートでしたね。私が生まれたのは、戦後四年ほどたつてからです。母はその高志保っていうところに作られていた、標準家（ヒョウジュンヤー）、今でいう仮設住宅に住んでいました。「ヤー」っていうたら家なんですネ。

母の実家があるのは、高志保よりももっとと残波岬に近いところ、渡慶次っていうところなんです。戦争で何もなくなつて、家もないし、そこは基地を作るからといって、入れない状態になつていたんで、母たちは、みんな、ちよつと手前の開放されたところに、村の青年団たちがススキを刈つてきて、そのススキで空地に茅葺家を作ってくれたので、そこに住んでいました。

今、仮設住宅を見ると、こんな感じで標準家もみんなの力で建てたんやなつて思います。家族によつて、部屋がちよつと多かつたり、少なかつたりっていうところだったそうです。私は記憶がないんですが、その標準家っていうところに私も住んでいたそうです。

終戦後、東洋一と言われた嘉手納空軍基地内の兵員食堂（メスホール）で働いていた母は、そ

ここで米国人の父と知り合い、私はアメリカ人とウチナンチュ（沖繩の人）の両親を持ち生まれました。

嘉手納基地のことは、おじいさんとか、おばあさんとか、ほかの沖繩の人たちは「エアフォース」とか「ベース」とか、そんなふうに言っていました。母は英語が話せるわけでも読めたり書けるわけでもないけれども、エアフォースやベースのように聞き言葉で英語を覚え、そのエアフォースとかいう軍の施設で働いてました。そこで、父と知り合ったそうです。その出会いは、国籍なんて関係ない。人間同士なら自然な成り行きだったのだと、今の私は思います。

その頃、そのような立場の子どもたちは多くなく、戦後の混乱がまだ続いている中では、ハーフの子どもに対して、まわりの人々や社会が理解、受入れが容易ではない環境での育ちとなりました。

父は母が妊娠したことも知らないまま、軍命で沖繩を離れたのだとか。おばあさんが言うには、「あんたのパパはステイツにゴーホームしたよ」って言うんですね。「ステイツ」は「アメリカ」で、「ゴーホーム」は「帰った」ですね。子ども心にもそれが分かりました。ただ、本当にそうだったかどうかは分からないんです。朝鮮戦争もその次にありましたのでね。父親は、ひよっとしたら、そこに行ったんかなどか思ったりします。

母はお腹が目立たない時期に、私が生まれないう、畑仕事を手伝ったり、畦道から飛び降りたり過激な動きをしていたそうですが、生命力があったのか、私は誕生しました。色が白く、

血管が透けて見える程だったそうです。髪の毛はうす茶色でほとんど目立たない私に、まわりの大人はビックリしていたと聞いています。アメリカ人を理解することがままならない戦後四年目のことですからね。日本人の子どもだとみんな信じていたので、ショックを受けて大騒ぎになったそうです。

母の父、私のおじいさんは激怒しました。おじいさんは、「誰も手助けするな、ほっとけ」っていうことで、産後間もない母は、この標準家の軒先をちよつと囲ったところで暮らしていたようです。でも、おばあさんは、やっぱり娘を手伝いたいからあれこれするけれども、おじいさんに見つかると、「手伝うな」って言われて困ったそうです。

アメリカ人は目が黒目じゃないんですね。ちよつと茶色いとか、青いとかありますもんね。沖繩は、食べるためにヤギや豚を飼うんですよ。うちも飼っていました。私はちゃんと見てないんですけども、ヤギも目は真っ黒じゃありませんよ。だから、アメリカ人もそうだし、私も真っ黒じゃないんで、ヤギの目っていうことで、「ヒージャーミー」とおじいさんにも言われました。沖繩はヤギをヒージャーミーって言うんですね。ヤギの目ということでは「ヒージャーミー」。ヒージャーミーって言ったら、もう、みんなイメージがわくわけですね。戦争中もアメリカ兵が来たら、「アメリカ兵はヒージャーミーで夜は見えないんだから、夜の間に竹やりでやれ」と言っておじいさんたちも、みんなそんな感じでやってたらしいんですよ。つまり「ヒージャーミー」イコール「敵」ですよ。だから、そんな子が生まれてくると、おじいさんもそういう

表現しかなかったんじゃないかと思います。おじいさんも、すごく優しい、私からすれば立派な人だったんじゃないかなって思っているんですけども、そのおじいちゃんも、「ヒージャーミー、ヒージャーミー」って言ってました。

その家には、母と、まだ結婚していない母の妹と弟が、おじいさんたちと住んでいたんですね。そのほかの兄弟はみんな結婚して出て行ったそうです。その長男のおじさんが、家族でそういう人が出たので、かなり嫌だったんでしようね。家に来たら、私を「ヒージャーミーや」と言っていて、「ヒージャーヤにくくつといで」とか、そんな感じで言っていたそうなんです。それは、ヤギ小屋にくくりなさいということです。それを、私は全然覚えてないんですけれども、私を育ててくれた叔母が、私とちゃんと大人になって、いろんなことが話せるようになったときに、私に聞くもんだから、こうだったよって、それを答えてくれたんですね。私は母のことをマーマーって言うっていたんで、「マーマー、ほんだら、大変だったね」と言ったら、「おばあは隠れて、世話してたけれども、他のみんなはそんな感じやったから、マーマーは栄養もないし、ミルクも飲まसानあかんのに、がりがりになって、隣の井戸でおむつの洗濯してたり、そのせい知らんけれども、何か、顔がむくんで、ちょっと見ていられなかったよ、私も十幾つやったけど」とって、言うんですね。その話は、小さい頃の私には言わないんですね。本当、もう、四十四、五ぐらいに私になってから、どんなんやったんって聞いたたら、そう言って。「実は私も、マーマーが赤ちゃん産んだって言うから、見たときにはびっくりして、気持ち悪くて抱かれへんかったよ」って



言っていました。

沖繩では、ある程度、色が真つ白じゃなくって、りりしい感じで、髪の毛もちゃんとあって、眉毛もちゃんとあって、そうして生まれてくるのが赤ちゃんのイメージなんです。産婆さんが来て、生まれたら、髪の毛はないし、眉毛もないし、色は白いし、血管が透けて見えていた。「気持ち悪くてね、みんな抱かなかったよ」って言うんですね。

母親はおとなしい人だったそうなので、それを受け入れて生活してたみたいなんです。生活をするにも、仕事がないんですね。お金になるような仕事ってないんですよ。母は、嘉手納基地で働いて、私の父親と知り合っただけなんですけれども、今度は、現在は返還されて読谷村の役場になっていきますが、当時そこにあった読谷飛行場の近くに米兵がいる家があって、そこにハウスメイドに行ったそうです。そこで、母親は、またアメリカ兵と恋愛関係になったみたいです。私が二歳ぐらいのときですかね。そこで、そのアメリカ兵との間に、私の弟となる子どもが生まれました。

その方は、すごく優しい人で、お金持ちだったんでしょかね。高志保の標準家がある近くなんです。瓦屋根の家なんです。だけど、今で言う瓦じゃないんです。セメントか何かで固めたような、グレーの瓦があるんですよ。それで家を作って、あの頃に流し台もあったんです。そこは、私は覚えていますが、タンスもベッドもミシンもあるんですよ。そのうち、アメリカに帰らないといけないことになって、アメリカに帰るとき、一緒に行こうっていうことにな

ったそうなんですが、その頃は、そういうモデルっていないですよ。だからあまり適切な言葉ではないかもしれませんが、「アメリカに行ったら捨てられるよ。あんなところ行って捨てられたら、あんだ、どうするねん」って言われたり、とにかく、モデルがあまりなかったからだと思いますけど、すごく迷ったようです。弟の父親はすごく優しく、私もすごく大事にしていたから、私は和枝って言うんですけど、和枝も一緒にアメリカに連れていくっていうことだったらしいですけども、母の踏ん切り付かないままに、結局弟と私も残して、父親は軍の命令でアメリカに帰ったそうです。

後で知り合いの研究者に教えてもらって知ったことですが、当時沖縄の人とアメリカ兵との結婚というのは、軍の中では将来に響くよ、出世とか仕事とかではプラスにならないよと思われるので、恋愛はいいけれども、子どもとか、結婚とかいうのは考えんほうがいいよっていう考え方があったらしいんですね。もし、そういうことになったら、配置転換などをして離すようにしていたようです。そのときに、自分の子どものことが気になる人もいながらも、やっぱり離れる人もいるし、だから、そういう母親だけの子が多くなったとも言われているらしいですね。

結局弟の父と離れ、ハウスメイドとして働いていた母は、体調を崩し、私が三歳、弟が一歳になる前に、二十三歳で病死しました。弟が、もうすぐ誕生日が来るっていうときのことです。母は、体を壊してみたいで、私が三歳のときに、ちょっとしんどいと言って、ぜんそくだった

んかなと、みんな言っていましたけれども、ほろ布団ですが、この布団にもたれるようにしていら、息がしやすかったらしいです。そのうち、もう息ができなくなって、これは大変だということになって、読谷村には病院がないので、ハウスメイドをしている母の友達の手で外人に頼んでジープを出してもらって、母親とその友達を乗せて、東海岸にある石川市の病院に行きました。石川市は、捕虜の収容所があったところで、那覇に政府ができる前は、この石川が首都になっていました。そういうところですので、小さな新聞社みたいなものもあるし、病院もあつたんです。だから、読谷から石川まで母を運んだそうですが、帰るときには、もう、ものを言わなかったらしいです。そのとき私は確か三歳だったんですね。三歳って記憶ないように思いますよね。けどね、強烈過ぎたかね、鮮明に覚えてるんですよ。母の葬式の時も。だから、棺おけも。その頃は、村の青年団が、この棺おけを担いでいくんですね。そのときに、母は照子って言うんですけど、みんなが「照子、照子、照子」って泣くんですよ。そしたら、私の頭が混乱してしまって、家中、「ママ、ママ、ママ」って走り回るんですね。それを覚えているんですね。弟の父親が買ってくれた黒いタンスがありましたけど、十何歳かの叔母が、その上に私を座らせて、叔母がおぶいひもで、立ったまま、私をおぶって、棺おけの列に私もついて行ったんですね。

お墓は、親戚の墓で借り墓だったらしいですけど、大きな墓でした。母親をそこに入れるのは覚えていないんですね。沖縄の場合は、亀甲墓って大きな中国の様式の大きい墓があって、そこはもう、洞穴みたいになってるんですね。そこに埋めるわけじゃなくて、順序良く入れるんで

すよ。古い仏さんは上の方に行くんですね。ちゃんと骨になるまでは、その前の、ちょうどホルミたいになってるところに置くんですね。きれいに髪の毛落ちて、肉も落ちて、きれいな状態に「洗骨」って、骨を洗うっていう儀式があるんですね。そのときに、墓の庭に親戚みんな集まって、それを出して、みんながまた死者と向かい合うんですね。亡くなるいうことは、すごく大変なことなんです。いつまでも人の心に残るんですね。そういう風習なので、おばあ（祖母）やったかな、おばあが母の骨を取って、辛いけれども、泣きながら頭をきれいに拭いて、髪の毛も全部きれいにして、こんな大きな甕（かめ）に入れるんですね。そのときにまた、この亡くなった人に対する思いと向き合ってるので、みんな「照子、照子」と言いながら泣くんですよ。ね。そしたら、私がまた、お葬式みたいな感じになって、お墓の庭中、「ママ、ママ、ママ」って、言ってる、走り回るんですね。それをおばあが止めて、おばあのお膝でやっとなお落ち着かせたらしいです。それがおそらく三歳だったので、親戚も「あんた分からんでしょう」って言うんですけどね、覚えてるんですね。だからその時、私はきつと脳にかなりダメージを受けたんだろうなど、私は納得してるんですけどもね。

私の父親は写真もなく、手掛かりもまったくないのですが、弟の父親の情報は、その弟さんだという若い米国人の写真が一枚ありました。育ててくれたおばあに聞くと、母が亡くなったとき、「この人たちのせいで照子（母）はこんな乳呑み児二人も残して早死にした」「イクサユ（戦世）もどうにか生き延びてきたというのに」と激しくなげき、まわりに置いてあった写真などを

ビリビリ破き、怒りをぶちまけてしまったそうで、私たちが学齢期になったころ、「置いといてあげれば良かった。この子たちのパパも今の世なら探せたかもしれないのによ。どこに居るのかねー」と、訪ねてきた近隣のお茶飲み友達に時々話す姿が思い出されます。

私と弟を生むことによって、親族からもまわりからも厳しく非難される存在になり、母は人生が大きく変わったようです。母の突然の病死後、私と弟は、祖父母、十代の叔母、叔父の住む豊かではない実家に引き取られ、育ててもらいました。

幼稚園は青空の下、ガジュマルの木の下などで雨の日は休み。画用紙のようなものを渡され、輪になって座った状態の子どもたちの間で、箱に入ったクレヨンが回ってきて、各々好きな色を選び一本ずつ取っていきます。引っ込み思案でおとなしかった私のところへ箱が来る頃には、茶と黒と、当時としてはあまりうれしくない色しか残っていませんでした。仕方なしに何か描いていたように思います。書きたいと思っていたチューリップなど、華やかで心躍るような色使いの花は、明るい色のクレヨンが手元に届かなかったので描くことができず、その色で描いている子の方を「いいなー」とうらやましく見ている意欲の湧かない時間を過ごす子どもでしたが、それでも休まず登園していた幼い頃の自分をほめてあげたいし、なぜか「ありがとう」という気持ちになります。

小学校では、米国人との間に生まれた子どもは容姿に特徴があるため、否応なく周囲とは違う存在として目立ち、身体の微妙な違いにも敏感に反応してしまう成長期にあるため、特に低学年

はそのことを言葉や態度で直接的に表現することが多く、居心地の悪い思いをしてきたように思えます。その要因の一つは、子どもは一般的に、保護者やまわりの大人に影響を受けることもあり、そのため人種が違うことへの否定的な考えを持ってしまったからかも知れません。

「アメリカー、アイノコ、ハーフ、ヒージャミー（青い目のヤギの目）」と言われ、続く言葉が「ヤンキーゴーホーム。アメリカはアメリカ帰れ、英語しゃべれ」でした。また、髪の毛が赤いから「アカブサー（赤い髪）」と髪の毛をつかみ、引きずりまわされるんです。アメリカがどこにあるのかもわからない頃ですから、「どこに行ったらいいんだろう、英語もしゃべれないのに、ここに居てはいけないのかなー」といつも不安で泣いてばかりの泣チブサー（泣き虫）でした。

自分が悪いと思ってしょんぼりして、自分の存在をしつかり捉えられずに過ごしていた小学校時代でした。その間には、アメリカ人家庭に二度貫われて行きました。養子縁組前提だったのか、一時預かり養育だったのか、よくわかりませんが、小学校二、三年生の時です。

最初は歳が割といかれた方の夫婦のところに行っただんですね。車で迎えに来るからうれしかったですよ。そこに行くと、ちゃんとベッドがあつて、テーブルの上にフルーツがあるんですね。ブドウやらリンゴやらがね。うちの家には何もないですよ。畑から取ってくるから、芋はいっぱいありました。冷蔵庫もあるんですね。開けたらアイスクリームがあるんですよ。誰かがすぐ溶けるようなアイスキャンデーいうのを作って売っていたのを、たまに食べたことはありませんた

が、アイスクリームなんか食べたことありませんでした。ちゃんとスプーンですくうアイスクリームなんですよ。夜になると、仕事が終わったパパという人が私の相手をして、こうして皮をむいて食べてごらんって、英語は分からないけれども、ジュスチャーで示してくれるから分かるんですね。こうしてむいて食べるって見本を見せてくれると、私も食べるんですね。そしたら、食べたって言うて、「グー、グー」って言うんですよ。ほめてくれるんですね。大人にこんなさされたことないと思って、すごくうれしかったんですよ。それから、おねしょ。小学校の二年生くらいまでしてました。おねしょも、水分をいっぱい取るからおねしょするんやって言われていて、「もう、あんたは晩御飯のときは、おつゆを飲むな」って言われてました。このおつゆってというのは、みそ汁ですけれども、そこに畑から取ってきた具がいっぱい入っているんですが、食べるものは御飯とおつゆしかないの、御飯しか食べられません。給料前は御飯でなく芋なんです。こうして汁を抜かれても、おねしょするんですね。「この子は何やねん」って、みんなに言われていて。でも、父親がアメリカヤから、家では、この子はどのこのいうことは、一切言わない。そういう意味では、貧しいけれども、大事に育ててもらったんですね。

そんな感じで、おねしょは悩みの種だったんですが、その外人の家でだと、寝るときに、まずパジャマを着せてくれるんですよ、パジャマ。パジャマなんか、テレビでしか見たことないですよ。着たきりスズメで、そのままはてと寝て、そのまま起きるそんな感じだったのに、パジャマ。それから、布団にはカバーがかかっていますね。おねしょすると、ママが、ちゃんと部屋

に来て、何やかんや言いながら脱がせてくれるんですね。顔は怒ってないんですね。それでまた、新しいのを着せてね、何言ってるかは分からないんですが、「はい、寝なさい」って、多分、そんな言葉をかけてくれたんでしようけど、そこで、また寝るんですね。これはええなとか思っていたんですね。

だけど、何日間かして、窓の外を見てましたらね、沖縄でキャンプっていう、野良着を着たおばあが弟の手を引いて、向こうの道から、こう来て、パッとおばあを見たら、何か、気持ちももう駄目なんです。おばあ」言うてね。それからは、パパとか、いろんな人が抱きかかえて、ハウスメイドも抱きかかえたけど、もう、私が収まらないっていう感じになりました。だけど、そこはどうか引き離されて、おばあたちは帰っていきました。でも、私も後ろからついていったと思います。いつの間にか、向こうに、貧しいところへ行っていました。

「このパパとママの方が豊かなのに、あの貧乏のところを何で選んだんかな」って、昔話をしているときにおばあに言っつて、笑ったこともありましたがね。

それから一年くらいしてから、もう一回ありました。おばあは字も書けないし読めません。でも私たちを必死で大切に育てていました。そこへハウスメイドをしていた同じ集落の方が「子どもを探している人がいるよ」って話を持って来て、「そこなら和枝はごはんも食べられるよ、ここに置いていたらおばあも大変でしょう」。おばあはまわりの人たちからずつと「この子は日本にいたら駄目だよ。アメリカに行かせた方がいいよ。泣くこともないよ」と言われていたので、



渋谷さういう流れになったのかも知れませんが。

ある日、私を貰いたいという読谷村内の外人住宅に住む、今度はそんなに歳のいっていないアメリカ人夫婦が、その頃珍しい乗用車に乗り私を迎えに来ました。きつとおばあは拒否できなかったでしょう。でも無理やりという雰囲気ではありませんでした。おばあから後で聞いたんですが、「ステイツにゴーホームは当分はない」って言うたので、「じゃあ、ちよつとだけ」って言うてね、渡したらしいです。私はといえば、大きく立派な車に乗れるし嬉しいなと思っていました。品の良いやさしそうなご夫婦でした。

むこうの家に着くと、テーブルの上に果物や食べ物、テレビもあり、リビングでスピッツを抱きながら、お姫様みたいな暮らし。シャワーも毎日使い、夢みたくて、言葉はわからなくても、不自由を感じないですね。大人（パパ・ママ）が私に合わせて向き合って、遊んでくれるんです。居心地が良かったです。夢心地の日々が何日か過ぎた頃、住込みハウスメイドをしていた、まだ若い叔母が、久しぶりにおばあのある家に帰ってくると、台所のランプの灯りの下で、収穫した豆をむいていたおばあに「和枝の姿が見えないけど、和枝は？」と問いかけると、泣きながら「アメリカに連れて行かれた」としょんぼりと言うので叔母はびっくりして、次の日にバスに乗り、私のいるところをつきとめて、迎えに来てくれました。パパ・ママは外出し、ハウスメイドの方と二人でいた私は、今度は叔母を見て急に里心がつき、大人がもめている間に、ルームシューズのまま嘉手納のバス停に向かう坂をワーワー泣きながら、まるで逃げ

るようにして走りました。必死でした。パパとママは帰宅後、私がいけないことをメイドから聞きびっくりしたことでしょう。

後で、叔母が追っかけてきて、叔母と一緒に帰ろうってなったけども、「今帰ると、車に乗ったパパとママが、今頃おばあのとこに行ってるかもしれないよ」って話になって、「じゃあ、今日は家じゃなくて、高志保の、私の友達の家のとこに二人で泊まろうか」って言って、そこに泊まったんですね。次の日、実家に帰ったんですけど、「やっぱり、前の日、心配して、車で駆けつけてきてたよ」って言うから、「家帰らんでよかったね」って言われました。その後、学校に行っただんですが、それまでははだしだったのに、靴がまずあるんですね。靴を履いて行くんですよ。そしたら、やんちゃな子たちが、教室から見てて、校門から靴を履いた私が入ってくると、ぱーっとみんな来て、「アメリカが靴なんか履いて生意気や」と言って、ウチナーグチ（沖縄の言葉）でまくし立てながら、靴を取って、投げるんですよ。それで、泣いて家に帰るんですよ。だけど、また、学校へ行くんですよ。

何日か経ち、学校に行くとう務員さんに「校長先生の所に行っておいで」と言われ、校長室の戸を開けると、品良くパパ・ママが座っていました。パニックになり、入ることなく泣き叫びながら家に走って逃げ帰りました。それから二、三日後、家に衣類や靴、おもちゃ等沢山の物を車で届けてくれましたので、しばらくの間、私と弟は裕福な家庭の子のおもちゃいっぱいの中で過ごしましたが、大人になって、パパ・ママの立場や気持ちを考えると、申し訳なく辛い

思いをさせてしまったと思う時があります。とてもいいご夫婦でした。

沖縄の人とアメリカ兵との結婚が推奨されていなかったにもかかわらず、私は二度も貰われたのはなぜか。これは、アメリカのジャーナリズムで、日本の子どもたちの教育環境が良くないので、日本政府は一体何をしているのか、アメリカがどうにかしないといけないんじゃないかと、ちよつと沸き起こったらしいです。アメリカが主導で養子縁組をして、アメリカで教育環境や生活環境を整えてあげる方がいいんじゃないかっていう流れがあったみたいで、私の身に起こったできごと、この話の延長線上で起こったことなのかなと思います。

横浜にあるサンダースホームというアメリカ人を父に持つ子の養護施設では、アメリカでの養子縁組によって子どもたちの持つ問題解決の糸口を見つけようという取り組みが行われていて、全国的に広がりを見せていたのがこの時期でした。

小学三年生の時、担任してくださった安田スミ先生は、私の事情もすべて受け止めてくださっていたのでしょうか、私をひざに抱き、櫛の通っていないモジャモジャの髪をきれいにといてくれました。また、爪切りも時々してくださり、うれしかったです。

オルガンの横に立たせ、「虹の馬車」も何度も歌わせてくださり、満ち足りた時間となりました。この頃の私は、自信がなく、あとずさりばかりして、心ない言葉が飛んでくるのを避けながら、目立たないようにしていたのですが、先生は寄り添ってくださっていたのだと感謝しています。

同級生に私と同じ立場のT君もいて、ウーマク（やんちゃ）で有名でした。私に「アカフサー（赤毛）アメリカ」と言うけど、そのT君は短髪にしている、赤毛がわかりにくいだけなので、「あんなも（アメリカ）でしょう」と心の中では発する言葉は出るけど、半ベソになるのが精一杯の私でした。

T君も、おじい、おばあに厳しく育てられていたから、今考えると、T君も辛かったんだろうと思います。中学校も休みがちで、今はアメリカで暮らしているらしいけど、同級生の間では、T君のウーマク話が話題になるほどで、「会いたいねー」となつかしい思い出話になります。

その頃、道では軍用ジープ、兵士を乗せた幌つきトラックがよく通っていました。通りがかりに指笛や口笛が「ビュービュー」「ピーピー」と兵士がにぎやかにするので、子ども心に、かわいくしていたら、連れて行かれるという思いがあつて、ほほを膨らませたりしながら、「私はかわいくないよ」とアピールします。でもチューインガム、チョコ、クッキー、飴等を投げられると、目の色を変えて拾い集めていました。

他の子より明らかに私の方に投げてくれていたので、自分たちの国の兵士が残した子どもが、ヒンガーマーウー（薄汚れた姿）しながら、汚れた服を着て、裸足で道を歩いている姿を見て、ちよつと胸が痛む兵士もいたのではないかとも思っています。

中学生になると、さすがに面と向かつて同級生からの言葉は少なくなりましたけど、道で出会う小さい子の集団から浴びせられる視線は嫌でした。遠慮がないから、「アメリカ、アメリカ

「」の連呼で、無視する振りをして、心と体は強張り、その場から遠ざかることしかできませんでした。

中学を卒業する頃、周囲の人から「生活も大変だからあの娘は早く働かせた方がいいよ」「ゴザでジョーヒチャー（女中奉公）させた方がいいよ」という声もあったけど、学歴のないことで肩身の狭い思いをしてきた叔父は、「心配しないで勉強しなさい。高校に行きなさい」と言い続けてくれました。外野の声をはねのけて、見返しなさいという感じでした。

勉強があまり芳しくない私は、本心では中卒で本土への集団就職という道にあこがれていましたので、早く都会へ出よう、そこなら私でもあまり目立たないし、お金も稼げるし、夢が広がると思っていたのです。

そんな私に、所属していたソフトボール部の顧問で、若い伊礼信一先生は、進学を勧められました。それほど乗り気でない私を相手に、夏休み中ずっと勉強をみてくださいました。高校は受かって、みんなに期待されている訳でもないし、高校はすごいものだっていう思いも自分の中にないから、発表の日には、見に行くこともないと思っていました。そして発表の日、家で昼寝中の私に、庭から「和枝、合格したよ」と大きい声で起こしてくださいました伊礼先生ですが、私はそれほどテンションは上がりず、喜びもそれほど湧かず、キョトンとしていたように思います。教育的な環境とは程遠い生活でしたし、身内にそういう体験をした人もいなかったせいか、「そんなに大喜びするもんかね」という感じでした。自転車で学校に戻る先生にも、気の利いた

感謝の言葉すらもかけてなかったのではと今は反省しています。

高校に行くと、小・中と一緒にだった同じ立場のほとんどの人たちは、姿を見かけなくなりました。家庭の事情や本人の都合で進学していなかったからです。その頃の沖縄での高校進学率は五十二%だったそうで、そんな中で私を高校まで行かせてくれた叔父には頭が下がります。ありがたいという言葉では言い尽くせません。

その高校では、黒人とのハーフでK子さんという嘉手納中学出身の、とても活動的でスタイルの良い方がいました。彼女は陸上部で活躍していましたが、卒業後、黒人兵と結婚し、アメリカに行ったそうです。まわりの大人の方たちが「あの子は向こうに行った方が幸せだよ、ここでは大変よ」と話しているのを聞き、胸が痛みました。色の黒い彼女は、私よりもっときつい言葉を受けながら過ごした幼い頃があったと思います。私と彼女とは一度も口をきいた事はありませんが、それはお互いに意識しすぎていたからかも知れません。

高校では、大嶺実清先生という、温かい人柄の先生と出会いました。事あるごとに「自信を持つんだよ」と声をかけ、ほめて、励ましてくださり、いつも見守られている、認められているという安心感を与えてもらいました。その事で、とつても輝いた高校三年間の学校生活を送ることができました。

卒業後は、大阪へ集団就職しました。ベトナム戦争と沖縄の祖国復帰運動のため、米国民政府が本土への就職条件を厳しくし、琉球政府と日本の労働省が就職斡旋を米国民政府の方針に沿

って行くようになっていたため、沖繩の新規学卒者は、主に本土の大企業の単純労働に従事していました。私も例にもれず、大阪にある紡績会社の女工としてでしたが、そこに決めた理由は、学べる場所が併設された会社だったからです。高校で学ぶことの大切さや楽しさを知り、学ぶことで夢や希望が描けるといふ、前向きになれる体験をしていたため、会社を選ぶにあたって、夢を実現する手立てがあることは理想でした。

「保育士になりたい」目標を持っていた私には、併設の保育専門学校は決め手となりました。あこがれの都会へいよいよ船出です。そのため「琉球住民」と記載されたパスポートを持ち、ドルを円に換えて船に乗って大阪へ出てきました。

とにかく公務員になりたかったんです。うちの近所、私の親戚にはそういう人がいなかったし、勉強したいなって思ったら、働いていくしかなくて、学校に行かせてくれる紡績の会社だったので、そこを選びました。紡績はハードなせいかな、その上通学となると定着率も悪く、辞めていく人もたくさんいました。私は三年間で卒業することができました。

その会社には、沖繩からそういう女工さんが、いっぱい来てましてね。沖繩から来ている人がいる中では、沖繩出身っていうことは隠せないんです。沖繩から来ている人にはハーフって言われていましたが、ハーフも隠せないんですよ。たくさんいるから、パッと見ただけで分かるんですね。親がいるか、いないかというのは、沖繩出身であっても分からないんですよ。私には自分には三つ隠さなかなことあるなって思っていました。「親がいないからこんなや」っ

て言われるのが嫌なので、親がないということではできるだけ言わんところ。ハーフというのも言わんところ。沖繩は、そんな嫌いじゃなかったんですけど、こっちに来ると、「えっ、沖繩って何でこんな言い方されるの」っていうのがすごくあったんですよ。だから沖繩出身もあまり言うたらあかんわと思っていました。私は都会の人になろうって思っていましたのでね。

三年で資格取得した私は、大都会東京の世田谷区職員となりました。大阪の庶民的な街より、上品な関東弁の街へ飛び込もうと、上昇志向で決めたのですが、結局、東大阪市職員として大阪に舞い戻りました。大阪人の感性が、ウチナーンチュ（沖繩の人）の私にも無理がなく合っていると感じたからです。それでも自分では、都会の人になってるつもりでした。

大阪に戻った後、結婚した私が、三十いくつか、四十くらいで、子どもを二人ほど産んだときだったと思いますが、テレビを見ていましたら、正しい題名は覚えてないのですが、NHKの番組か何かで、太平洋を渡った子どもたちみたいな番組を放映していました。それを見ていたら、私の若い頃に似た子とか、孤児院の子どもさんなどが、養子縁組でアメリカに行ってるんですね。そしたらやっぱり、いい環境で育てられた子と、そうじゃなくて、労働力として迎えられた子とかがいて、中には、日本に逃げ帰ったり、向こうでどこかに行ってしまったりとか、かなり大変な思いをしている人たちがいてたんですね。

その頃には、私はもう大阪に来て長い時間が経過して、自分が隠そうとしてきたことは、自分から言うこともないし、聞かれることもなかったもので、泣くようなことはもうなかったんです



ね。それが、この番組を見たときに、本当にもう、今でも涙出そうなくらい、すっごく泣いたんですよ。あれ、私、それ乗り越えたと思ってたのに、何でって思いましたが、あつ、逃げようとしてるのは、私だけと違うんやなつて。内地にもおったんや。ほんで、逃げたつもりで向こうに行つたのに、嫌な思いをしたり、それで逃げ帰ったり、向こうで行方不明になつたりしたんやつて思つたら、私は、まだ自分でちゃんとできてるつもりやから、私はまだいいほうやんか。ああ、もつとすごいことがあるんやなつていうのが分かつたんですね。でもそのときは、そのまま心に収めて、あらためて向き合うということはなかつたんですけれどもね。

それから、ちよつとしてからですね。東大阪の市役所で人権に関わる人たちの中には、ちよつと興味があるからとか、これは取り組みやからと、沖繩の問題に関わる方もおられます。私は、ものすごい、それを感じるんですね。あつ、この人は、本当は沖繩を上から目線で見てるんとか、興味本位でしてるなとかいうのが分かつたりするんで。私は言葉も変やし、沖繩出身はもつてばれてますので、労働組合とか何かで、「沖繩の問題をテーマにするから、ちよつとおいで」つて言われたんですが、「私、沖繩のこと分らないんです」つて答えて行かないんです。沖繩のことは知らないで通すんですよ。「いや、でも、高校まで行つてたんでしょ。沖繩の食べ物とか、そういうことでも知りたいねん、何か話してくれへん」つて言われるんですが、あつ、また、「豚のミミガー食べてるんでしょ」とか、「豚の足食べてるんでしょ」とか、「ティビチとか、ゴーヤ、あの苦いの食べてるんでしょ」とか聞くつもりやなと思つてしまふんです

ね。そういうことは、やっぱり劣等意識が植え付けられてたんでしようね。これは言うたらあかん。私は食べたことないよなんて答えるんですね。でも本当はそんなことないです。よく食べてました。庭になつてるゴーヤも、「もう、またゴーヤか、嫌やな」と言いながらも、おばあに「これ食べないと何食べるねん」って言われながら食べてました。「沖繩は豚の足も食べるんでしよう」って聞かれた時は、「私、あんまり食べたことない」って言ってましたが、豚足もよく食べてました。親戚が豚を潰す言うたら、そこに親戚みんな行きましたし、うちの庭で豚を潰すときもありました。それもちゃんと見えますし、頸動脈ですかね、切るのが上手なおじさんがいます。それを切つて、血が出ると、みんな、女の人は鍋でこう受けるんですね。これを固まらせて、いためて食べるんですよ。朝鮮の料理にもね、それを腸詰めにして食べるのがあるんですね。それは、後から分かつたんですけどね。だけど、もう品のない、ほんまに、げても食いついていう言葉があるけど、沖繩はそんなやつっていうイメージが、自分の中にあるんですね。だから、「食べたことない」って言うけど、豚足はおいしいんですよ。今でも帰ったら、すぐ食べます。肌のためにもいい言うて。それなのに、もう平気でうそをつけるんですね。食べたことない言うて。「沖繩の人はよく食べてるって言うけど、うちは食べたことないねん」。「じゃあ何食べてるの」って聞かれたら、ステーキとか言っていました。ステーキなんか食べるはずない。軍の中の、税金のかからないところで買ってきたステーキを、闇で買ったおっちゃんたちが、ステーキ肉やつて言うて、硬いステーキ肉を、ちよつとだけ食べさせてくれたことは

あるけれども、ステーキなんか、そんなに食べるほどじゃありません。一方、豚の耳は食べました。ミミガーもおいしいです。ゴーヤもよく食べたし、ニガナもよく食べるし。だけど、沖縄の文化とか言葉もそうだし、何か珍しがられたり、そんなふうに思われるなっていうのは、私は否定していたんですね、こっち来た時期はね。だから、紡績では、同じ女工に沖縄出身者がいるから、そこまではうそをつけない。役所に入ってからはお嬢様になりたかったんですね。知らない、知らない言うてね。だから、そういう会には一回も行かないですよ。四十四、五歳のときに、その人権関係の集まりで、この人ほんまに沖縄のこと知ってる、聞きたいんやなって人がいたんです。沖縄の人に似た感じって言われたら、あの頃はみんな嫌がってたんですね。沖縄の人はしゅつとした弥生系じゃない縄文系だから。ひとり芝居をする藤木勇人さんは、僕は頭が大きくて、首短くて、手足短くって、毛深くって、僕は縄文系ですって言うていたんですね。この沖縄のことを本当に知りたいと思ってる役所の人にそのことを言ったら、「あつ、そうなんか、そう考えたらいいんか」って言うんですね。この人は、大学時代から悩んでたつて。「何で僕はこんな首短くて、毛深くって、こんななんやろうって思ってたけど、そうや、僕もひょつとしたら、縄文系で沖縄の人と一緒にかもしれない」って本気で喜ぶんですよ。私、縄文系は相手をけなす言葉って自分の中で思ってたんでしょね、きつと。沖縄は自慢するところがないつて。だからこの人、何喜んでるのって思ってたね。「そういえば、そんな感じのおっちゃん、沖縄には何ほでもいてるで」って言うたら、「えーそうなんか」って言って、喜ぶんですね。私は

逆に、その人が、何でこんだけ喜ぶのって思っただけショックだったんです。あつ、沖縄は差別されてるとか、自分の中で思ってたけど、一番沖縄を見下したのは私やなっていうのに、そのとき気づいたんですね。だから、あれだけ食べてたのに、「ティピチも食べたことがない」って言うって。こっちに来てからゴーヤも本当に食べなかつたですね。そうめんチャンプルーも食べません。だからこっちの料理が、大分上手になりました。それでやってきたのに、そういう思いになった途端に、沖縄がすごく身近になって。一番の差別者、私やんかって思っただけ。そんなふうに思ってきたのは、やっぱり私の生い立ちにも関係あるかもしれないし、避けてないで知らないとかあかんかって思い始めて、いろんな文献、いろんな講演会、いろんなところに行つたんですよ。そしたら、やっぱり文化は違うんですよ、こっちと沖縄は。ほかの国もそうですけれども、歴史を見たら、当たり前の話なんです。それから今度は、今日もそうですけれども、沖縄を知ってほしいって思うようになって、そういう活動をし出してからは、沖縄が本当に身近になりました。

今は、幾ら賢そうな人が沖縄のことを理路整然と言っても、どこかの言葉で、沖縄をちよつとも見下してるなっていうのが見えると、この人は私、もう駄目。あの人はあかんって思ったり。それから、この人はちよつとなどと思う人が、沖縄に心寄せてるところをちよつとも見せたら、私にとつてはもう、すごい人になります。あつ、この人はいい人だつて。だから、人間って幾らあがいても、自分のふるさととか、そういうところというのは大事なんですね。私はそんな

ふうに思っています。

字も読まれへん、ウチナーグチしかしゃべられへんおばあが学校に来て、「ウチナーグチするから、しゃべらんといてよ」っておばあに對して思っていました。体が弱くてあんまり学校に行つてなかつたから、字を書くとき、片仮名と平仮名を一生懸命混ぜながら書いてた、私を育ててくれた無口で真面目で、汗かいて働いてた叔父も、嫌やな、人には紹介したくないなつて思っていました。それが沖繩を素直に受け入れられるようになったら、ものすごい最高の人たちに、私は囲まれて暮らしてたんやなと思つてようになりました。

叔父が生きているときには、学校に叔父が来たたら、何かもう常識のないようなことせえへんか なつて勝手に思つてたんで、叔父が来てもうれしそうな顔しないし、帰るときも、トラックに乗つて帰るから乗りなさいつて言われても、私はいい言うて、バスで帰つたんですね。叔父には育ててもらつたのに、本当に愛想も何もなし、何のお礼も言わないままに、私が二十歳のときに、タンカーに乗つてアラビア沖で亡くなりました。叔父が亡くなつてから、何もしてあげられなかつたと後悔しています。せめてもの償いと思つて、叔父が残したお嫁さんやその小さい子二人に對して、沖繩に帰つたら、叔父の代わりに何かしようつていつも思っています。おばも一人です。おばを御飯に連れていったり、叔父ができなかつたことを私がやらなあかんなつて思っています。だから今は、自己満足で、自分が残したことを沖繩に帰つたらやつていゝんすね。

いろんな話を今、聞いています。子どもの頃の私のことを実際聞きたいなって思ったら、もう、皆さん、遠いところに旅立ったり、施設に入ったり、あれはどうだったかねとか言って、聞けないことがいっぱいあるんですよ。行動を起こすんやったら、早い方が良かったなって今思っています。

私の場合は、父の血を否定し続け、日本人（沖繩の人）になることだけを心掛けてきたのですが、二〇〇二年、沖繩にあるアメラジアンスクール校長、セイヤーみどりさんとの出会いは、私に大きな影響を与えました。一九九八年、日米の制度のはざまに置かれ、苦労を重ねてきた母親たちが「子どもたちにダブルの誇りを持って欲しい」との思いから、ダブルの教育（日米両方の言語、文化を教え、学ぶ）により、アメラジアンとしてのアイデンティティを確立するという教育方針を掲げて、「アメラジアンスクールインオキナワ」を立ち上げたのです。アメラジアンは、アメリカンとアジアンを両親に持つ子どもたちを表す言葉です。母親たちが、思いを重ねていける言葉として選んだそうです。

「お父さん（米国人）と英語で話せるようになりたい」という子どもや、通学していた地域の公立校での周囲のまなざし、関わり方の中で、強い不安を感じた体験など、色々な思いを持つ子どもたちにとって必要な学校だったのです。二〇〇二年の大阪府人権福祉施設連絡協議会主催の「アメラジアンの教育権を考える」というシンポジウムが開催される時、パネラーとして招かれたセイヤーみどりさんから、「スクールの子どもたちは思いをまだ話せないし、アメラジアン

の先輩として、是非思いを語ってほしい」と私は言われたのです。

十八年近く前、戦後六十年近くも経っていましたが、まだまだ後輩たちがつらい思いをしていることを少しでも皆さんに知っていただき、一緒に考えていただくことができたら、それは私の役目だなと思い、子どもたちに光の当たることを願いながら、私もパネラーとしての出席を決断しました。

このことを契機に、私は機会あるごとに自分の生い立ちや思いを話すようになりました。スクールに来ていた子どもも、来ていない多くの子どもたちも、みんなが生き生きと幸福に生きていける社会になっていくことを願いながら、私は話をさせていただきました。そしてその後、スクールを訪問し、「私たちはそれぞれ人生というステージに立っている主人公です。せっかく与えられた一度きりのステージなら、まわりに惑わされることなく、自分の可能性を見つけ、自分の力を信じて、前向きに生きていたいと思いませんか。私はいつもそう思い、何度も自分の心を立て直しながら生きています。小さい頃、泣き虫で弱虫だった先輩として、自信を持って、自分を信じて、自分を大切にできる人間になってほしいなと心からそう思います」とスクールの子どもたちにメッセージを送りました。

私は大阪での生活が長くなりましたが、バックボーンは依然として沖縄です。私のモチベーションは沖縄。それだから頑張れると思っています。時間がかかったかもしれないが「今が一番」です。今のために昔の経験があったんだと思っています。

そして今でも人前で話をするには気おくれを感じる時があります。ウチナーグチ、大阪弁、関東弁、イントネーションなど、ごちゃ混ぜで、スマートにきれいに流れるような話し方にあるのがれているのに、全く自信がありません。これはもう、私が生きてきたあかしなので、これが私だから今さらもう努力はしません。これからもこのまま生きていきます。

というところで、本日は聞きづらいくらいところがあつたと思いますが、長い時間お聞きいただきありがとうございました。

○司会 大矢さん、ご講演どうもありがとうございました。

大矢さんをご経験されたことや、考え方などをお聞かせいただきまして、大矢さんが自分の生い立ちや、自分の弱さと向き合う過程を通じて、周りの人たちの弱さや、誰の中にも差別する心はあるということを理解した上で、それに負けずに、違いを認め合いながらも戦っていくことで、自分の未来を切り開いていくことの大切さなどを学ぶ機会になったことと思います。

それでは、本日は、まだまだもう少しだけ時間がございますので、皆さんのご質問をお受けしたいと思います。質問のある方は挙手をお願いいたします。どなたか質問のある方ございませんか。

○質問者 大矢さん、貴重なお話、とてもありがとうございます。一つお伺いしたいんですが、ちょっと思い出したくないかもしれませんが、子どもの頃に学校で大変いじめを受けたというお話があつたと思うんですが、そのとき、学校の先生っていうのはどんな態度だったのかということと、あともう一つ、もし失礼がなければお伺いしたいんですけれども、大阪に来られて、結婚



されるとき、何かそういった大きな障害とか壁、ありませんでしたか。この二つ、もしよかったらお願いします。

○大矢和枝 はい。私の気持ちを話させていただきたいと思います。やっぱり、学校で守ってくださいるのは、学校の先生が一番なんですけれども、私はベビーブームの生まれなんです。一九四七年から四九年ぐらいまでがベビーブームだったと思います。が、ちょうどその最中なんです。だから当時は、子どもたち、たくさんいたんですよ、クラスも多くて。

沖縄に帰ったとき、戦後復興などをまとめている本を読んだりする機会があるのですが、その中で学校教育について書かれているところなどは、沖縄とこっちの内地って言われているところでは、立ち上がりはかなり差があったんだなっていう思いがします。戦争でペレしゃんこになった時代があるので、余計にそう思います。

学校をつくり、教師の確保には並々ならぬ尽力が求められていた時代で、教育指導者の育成にも待ったなしの頃ですから、諸々の問題（家庭環境、教育環境、人種、人権など）が子どもたちの生まれ育っていくまわりに山積みされている中では、先生方の気苦労も多かったと思います。一人ひとりの子どもと向き合える余裕は、それ程なかったかも知れません。また、それを大きな問題としてとらえることも、私のまわりではあまりなかったと感じています。社会を支える基盤そのものが十分に期待できない時代ですので、先生個人で解決できる問題は少なかったと思います。

二つ目の質問の結婚のときの話ですが、私の場合、結婚は二人の気持ちが一番大事だと思っていて、それが基本だと思っています。相手の母親からは、息子のことを思う親心として、気になることは言われました。その言葉で彼がもし、ちょっとでも揺らぐのでしたら、私と彼との結婚はありませんでした。相手を知りたいと思う気持ち、相手を傷つけている場合があることもあります。二人だけでは解決できないことがあったり、起こったりするときもあります。その時も基本は二人で話し合うことではないでしょうか。二人の意志で進めていけたらいいと思っています。

○質問者 ありがとうございます。

○司会 大変残念なんですけれども、お時間のほうが参りました。申し訳ございません。

それでは、本日、ご多忙にもかかわらず、ご講演をいただきました大矢和枝さんに、もう一度大きな拍手をお願いいたします。(拍手)

ありがとうございます。それでは、これで本日の講座「生きること」の講演を終了いたします。本日はどうもありがとうございました。